

JOMF 派遣医師便り (2015. 9)

◆マニラ◆

災害による死因を探る

マニラ日本人会診療所

菊地 宏久

今回は現在興味を持っている法医学と災害医療との関連で話をします。
(法医学とは、「医学を基礎として、法律的に重要な事実関係の研究・解釈・鑑定をなす学問。犯罪医学・裁判医学ともいう」(広辞苑))

2015年7月に日本渡航医学会学術総会での発表のために一時帰国をしました。帰国した折り、東京大学医学部の「健康と医学の博物館」を訪れました。「死の真相を知る医学—法医学—」というテーマで企画展が行われていました。法医学に関する非常に貴重なデータや写真、顕微鏡検査や精密機器による検査資料など一般では見ることはできないものばかりが展示されていました。例えば検察や犯罪捜査と医学の関連、また事故、自殺、病死などの死因究明の科学的方法、そして災害医療における個人同定、死因分析などとても興味深い内容が展示・説明されていました。

当然のことですが、自然災害時の死因は災害の種類によって大きく異なります。例えば同じ地震でも発災場所や規模により異なります。死体検案では全身の損傷の場所、数、種類など、それが生前にできたものなのか、亡くなってからできたものかを鑑別し死因を特定します。溺死(溺れて死ぬこと)と考えられる場合には胸腔穿刺で肺の周りに水が貯まっているかどうかなども確認します。(第8回企画展「死の真相を知る医学—法医学—(p. 30)」より)。

2011年3月11日に起きた東日本大震災では1万5891名(警察庁、2015年3月11日現在)のご遺体が検案され、その9割強の身元が確認されました。主な死因は、“津波による溺死”が9割以上と推定されています。

一方1995年1月17日に起きた阪神・淡路大震災では都市部の建物の崩壊による“窒息や圧死”が7割強でした。(第8回企画展「死の真相を知る医学—法医学—(p. 30)」より)。

地震という現象は同じですが、発生した機序、大きさ、場所、深さ、時刻などにより死因は大きく異なってきます。

2013年11月フィリピンを襲った巨大台風Yolandaでの被災はどうだったのでしょうか。非常に巨大な暴風雨により多数の建造物が破壊され、著しい低気圧が海面を持ち上げ、まるで巨大な津波のように高潮が陸地に押し寄せました。人や物は建物や道路に叩き付けら

れ甚大な浸水被害が引き起こされました。約 8000 人の犠牲者・行方不明者が出たと報告されています。私が発災当初現場を訪れた時に被災者の方々が「家の 2 階まで海水と壊れた建物が一気に押し寄せてきた。水が引いた後には多くの壊れた家々の残骸と多数の傷ついた死体が至る所に横たわっていた」と話していたのを思い出します。

強く叩きつけられた時の外傷や打撲、溺水により多くの犠牲者が出たことが推測されま

す。

死因を究明することは死に至った経過を導き出すことにつながります。死への経過がわかれば予防法・治療法や国や世界が行うべき政策計画につながります。東京大学医学部法医学教室・岩瀬博太郎教授が述べています：「犯罪だけでなく、事故、自殺、病死、などの死因を明らかにすることによって個々の遺族の要望に応えるとともに、複数の事例の検討を通じ、同様の事故、感染症などの再発を防止することも法医学の非常に大切な使命です」（「死の真相を知る医学—法医学—(p. 1)」）。

まさにこの言葉のように死因を探求することは現在生きている人の病気や事故の予防、災害時に行うべき適切な医療を構築することに繋がっていきます。法医学は非常に興味深い学問だと思っています。

付録：

東京大学医学部「健康と医学の博物館」は文京区本郷の医学部図書館地下 1 階にあります。2015 年 9 月中旬より第 9 回企画展「大腸のふしぎ」が始まります。どなたでも入館ができます。ぜひ訪問してみてください。

皆様お体大切にしてください。

(2015 年 9 月 10 日記)